

## 雑誌『あっちこちば』

### 「千葉県内の鉄道路線×〇〇で魅力再発見」をテーマに、企画、取材から制作まで

江戸川大学 メディアコミュニケーション学部 マス・コミュニケーション学科 本多 悟ゼミナール 4年

中川由菜、足尾 葵、妻神実咲、武田仁美、堀尾かのん、宮古侍音

#### 1. 本多ゼミの活動内容と制作スケジュール

本多ゼミは、総合出版社・光文社出身の教員による指導のもと、出版コンテンツ制作の基本となる編集知識を習得することで、一生使える「編集力」を身に付けることを目標としている。その成果物として、2021年度のゼミ1期生より、毎年4月から翌年1月までの約9カ月をかけて、企画、取材、撮影、原稿執筆、レイアウト、印刷、製本などすべての制作工程を学生が主体となり64ページの雑誌制作をおこなっている。

おおまかな制作スケジュールは、以下のとおりである。4月～5月：コンセプト決め、台割作成、ラフレイアウト作成、取材先のリサーチ。6月～7月：雑誌の前半ページを担当するグループと後半ページを担当するグループに分かれ、グループごとに取材先の選定。8月～9月：取材先のアポイント取り、取材、原稿執筆開始。10月～1月上旬：原稿完成、入稿準備、DTP作業、印刷・製本作業。

#### 2. 『あっちこちば』の由来と概要

江戸川大学が千葉県流山市にあること、ゼミ生は千葉県で生まれ育った3名と地方出身で大学進学時に千葉県に移り住んだ3名で構成されていることから、千葉県をテーマとした雑誌を作ることは早々に決定していた。数回にわたる話し合いを経て、「千葉県内の鉄道路線ごとに異なるテーマを設定して、魅力再発見の旅をおこない紹介する」とのコンセプトが決まった。

『あっちこちば』の誌名は、「あちこち」と「千葉」を合わせた造語である。雑誌の内容・題名を話し合っている際に自然に出た、「千葉県内を相当あちこちまわらなきゃね」という一言からひらめきを得たものである。ゼミ生が実際に足を使って千葉のあちこちを巡り、自分の目で確かめた「生きた情報」を届けたいという思いが込められている。

オープンキャンパスに来場する高校生への配布と大学公式ページでの公開を前提としているため、読者ターゲットは江戸川大学を志す受験生および新入生とした。学生でも気軽に訪れやすいよう、公共交通機関だけで行けることを前提とした。「千葉とはどんなところか、どんな魅力があ

るのか」をより具体的にイメージしてもらうための等身大の「地域密着型ガイドブック」である。

#### 3. 台割・レイアウト作成、取材準備

雑誌制作の最初の工程として、台割とラフレイアウトを作成し、誌面全体の方向性を確認した。ラフレイアウトを最初に制作した理由は、自分が担当するページ全体の雰囲気や事前につかみ、取材時にどのような写真を撮影し、どのような取材をおこなえばよいのかを明確にするためである。

ラフレイアウトの段階では、載せる写真の大きさや枚数、内容、撮影したい具体的なシーンに加え、仮タイトルや文章として伝えたいことについてもおおまかに考えた。あらかじめ必要な要素を整理しておいたことで、取材中に迷うことが少なくなり、効率よくスムーズに進めることができたと感じる。

ラフレイアウトを制作する際に特に意識した点は、写真や見出しを大きく配置することである。視覚的に目を引く構成にすることで、読者がページを開いたときに内容が直感的に伝わるよう工夫した。

さらに、文章や見出しについては、何字詰め何行で構成するか、どのフォントを使用するかまで具体的に決めた。あらかじめ文字量やデザインの方向性を明確にしておくことで、後の編集作業がしやすくなり、全体の統一感を保つことにつながったと思う。

#### 4. 前半班の取材活動

取材は3人組のグループを2つ作り、それぞれ夏休み中に活動した。前半班の取材担当テーマは、①小湊鉄道×自然、②銚子電鉄×海鮮、③外房線×海のレジャー、④内房線×陸のレジャー、⑤新京成線×ラーメン、⑥京葉線×聖地、⑦成田線×レトロである。

店舗への取材依頼にはとても苦労した。電話、メール、InstagramのDMなどで連絡を試みたり、取材の趣旨や使用用途をまとめた書類を作成したりするなかで、うまくアプローチできず断られてしまうことも多々あった。それで

も多くの取材先が「学生さんのためなら」と温かく迎え入れてくれ、多忙なか時間を割いて丁寧に説明してくれたおかげで、良い記事を書くことができた。

とあるレストランの取材では、撮影を担当したゼミ生がカメラを持っていたところ、調理人が「良かったらこちらからどうぞ」と、調理している手元が撮れるよう案内してくれた。このような協力のおかげで、通常では撮れないカットを掲載することができ、誌面がより豊かになった。

## 5. 後半班の取材活動

後半班の取材担当テーマは、①千葉都市モノレール×公園、②常磐線×カフェ、③総武線×博物館、④東武アーバンパークライン×神社、⑤東金線×果物狩り、⑥京成本線×おみやげである。

「常磐線×カフェ」のページは、コンセプトを「最寄駅から徒歩 10 分以内で行ける、おすすめポイントいっぱいのカフェ特集」とし、千葉県松戸市と柏市にある 4 店で取材をおこなった。当初から 4 店取材をしたいと考えていたこともあり、早めにアポイント取りを進めていたが、20 店近く断られてしまった。後半班のメンバーにほかにどのようなお店があるのか調べてもらい、アポ取りのアドバイスをもらいながら進めていき、無事に 4 店の取材先を確定することができた。とある喫茶店では、取材時に快くさまざまな料理を振る舞ってくれ、後日プライベートで訪れた際には、『あっちこっちば』を置いてあり、とても感激した。

「東金線×果実狩り」のページは、千葉県東金市にある「東金ジャンボブルーベリー」で取材をおこなった。取材が円滑に進められるように、事前に LINE のグループでどのようなスケジュールで動くのか確認をし、どのような質問をするのかメッセージにまとめておいた。しかし、取材当日に遅刻してしまうなど、限りある時間のなか、協力していただいた取材先に迷惑をかけるってしまう場面もあったため、こまめにメッセージのやり取りをすることがとても重要であると学んだ。

## 6. 原稿執筆、入稿準備

9 月下旬から始まる後期の授業に備えて、夏休み中の取材をもとに雑誌に掲載する本文原稿を執筆した。取材後できるだけ早い段階で文字起こしをおこない、すぐに本文作成に取り組んだ。記憶が鮮明なうちに執筆することで、取材中の雰囲気や細かなニュアンスを思い出しやすく、発言

の背景や意図を踏まえた文章を書くことができたと感じている。

本文作成にあたっては、事前に作成したラフレイアウトで決めた文字量を意識しながら、取材音源を聞き返し、そのなかから特に読者に伝えたい内容を選び出した。ただ発言を書き起こすのではなく、情報の取捨選択をおこない、内容が分かりやすく伝わるよう整理しながら文章にまとめた。

文章を書く際に特に意識した点は、取材相手の印象に残る言葉や、取材中に何度も繰り返し出てきた言葉を積極的に取り入れることだ。そうすることで、取材相手が本当に伝えたかった思いや考えを、できるだけそのままのニュアンスで読者に届けられるよう心がけた。

10 月から始まった入稿準備では、取材後の文字起こしなどのまとめができていないメンバーがいたため、作業をスムーズにすすめられず、進捗具合にばらつきがでてしまった。

書き上げた原稿は本多先生の校閲を経て、Word 形式でデータを作成する。原稿完成と掲載する写真を選び、先生が確認をする作業が当初の予定よりも遅れてしまい、12 月末にかけて、毎日のように大学の DTP ルームで編集作業を進めていった。そのため、自分が担当したページの作業が先に終わっていたゼミ生が表紙や裏表紙、目次の作成をおこなうことになった。一つ一つの作業について、班員同士でしっかり話し合うべきだと編集作業を通して感じた。

## 7. DTP 作業、印刷・製本作業

本多先生による原稿と写真、修正したラフレイアウトのチェックなどの入稿準備が終了後、DTP 作業へと移行した。大学の DTP ルームには、Adobe の各種ソフトが利用できる iMac8 台がある。まず、画像編集ソフトの Photoshop を用いて写真の補正をおこなった。明度や彩度の調整に加え、誌面品質を保つためにすべての画像を印刷に適した解像度へと最適化していった。

次に、レイアウトデザインソフトの InDesign を使用した。フォントの選定から写真とテキストの配置、配色、背景デザインに至るまで、すべての工程を各自が最後まで担当した。それぞれのこだわりが反映されたことで、非常に個性豊かな誌面に仕上がったと感じている。

印刷工程では、まず各自が担当したページを一つのデータへと統合した。その際、全体の統一感を出すための微調整や、サイズの整合性を確認する作業をおこなった。出力には A3 ノビ用紙を使用した。実際に印刷してみると、画面上では気づかなかった色の差異や予期せぬ余白の発生など、課題が多く見つかった。そのため、納得がいくまで

何度も試し刷りを重ね、細部の修正を繰り返した。最終的に先生から OK をいただき、ようやく印刷を完了することができた。

仕上げの工程では、印刷時に生じる余白を裁断機で丁寧に切り取り、専用のホチキスを用いて製本をおこなった。今回の制作を通じて、細部へのこだわりの積み重ねが、最終的な雑誌の完成度を左右するというのを深く実感した。

## 8. 反省点

反省点はたくさんある。取材のスケジュールを明確に設定していなかったため、予定通りに動くことができなかった。

取材交渉をする際にメールを送ることが多かったのだが、先方に気づいてもらえることの方が少なかったため、一週間返事がなかったら直接店舗に行くか、電話で確認したほうが円滑に取材活動を進めることができていたのではないかと感じた。

また、取材したいお店の情報が更新されていないことがあるため、すぐに電話で確認し、わからないことや不確定な部分を必ずなくすべきであると思った。

反省点はまだある。早めにアポイントを取り取材をすることで、編集作業をもっと円滑に進めることができるのではないかと感じた。

雑誌のコンセプトがどのようなものだったのか、つねに頭のなかに入れておき、決められたコンセプトから脱線しないようにすることで、取材活動、編集作業がスケジュール通りに進められるはずだ。

写真撮影では、ピントが合わず、逆光となっている写真も多くあった。結局、補正作業に時間がかかり、写真を借りることもあったため、必要以上に撮影しておくべきだった。

## 9. 雑誌制作の感想・学んだこと

雑誌という形に残る媒体を作るため、責任感を持ってやらなければならなかった。コンセプト決めから編集作業まで、視野を広げていき、細心の注意を払って雑誌制作をおこなった。

また、普段、何気なく読んでいた雑誌は、いざ作ろうとすると、じつはたくさんの労力がかかることがわかった。なかなかアポ取りを進められず、とても悔しい思いや大変な思いをしたが、メンバーと協力しながら取材活動を進めることができた。そして、決して諦めることなく、64ペー

ジの雑誌を完成することができ、大きな達成感を得ることができた。

「日本地域コンテンツ大賞 2025」において、学生による地域メディア制作を評価・表彰する MIE (Magazine In Education) 部門で最優秀賞を受賞できたことも大きな喜びとなった。

### 【謝辞】

本雑誌の制作にあたって、快く取材に応じていただきました関係者の皆様に感謝申し上げます。

### 【『あっちこっちば』】

発行：2025年1月7日

江戸川大学 メディアコミュニケーション学部

マス・コミュニケーション学科

本多 悟ゼミナール 4 年生 (4 期生)

ゼミ長：中川由菜

編集：足尾 葵、妻神実咲、武田仁美、堀尾かのん、

宮古侍音

担当教員：本多 悟